

第十一章 土地の地代——その性質と形成（一）

地代は土地の使用料であり、その水準は、当該地の条件のもとで小作人が支払い得る最大額に自然と収斂する。契約交渉では、地主は小作人に、種子費・賃金・家畜や農具の購入維持などの運転資金と、近隣で見込まれる通常の農業利潤だけを確保させ、超過分は地代として取り込もうとする。小作人が損をせず受け入れられる取り分はこの最小限で、地主がそれ以上を残すことはふつうない。産出（または販売額）からこの最小限を差し引いた残りが地代であり、それが小作人の支払い上限でもある。もともと、地主の寛大さや、ときには無知によって地代がこの水準を下回ることもあれば、逆に小作人の無知から地域の通常利潤を割る条件を呑むこともある。それでも基準となるのはこの水準で、これが多くの土地で想定される自然的地代である。

地代は地主が改良に投じた資本の利潤や利子にすぎない、という見方もあるが、当てはまるのはせいぜい一部にすぎない。未改良地にも地代は課され、改良に要した費用の利子や利潤は、その原始地代に上乘せされるのが通例だからである。しかも、改良はつねに地主の資本で行われるわけではなく、小作人が資金を出すこともある。それでも更

新の際には、地主はあたかも自らの投資であったかのように、同程度の地代増額を求めるのが一般的である。

地主は、ときに人の手による改良が不可能なものにまで地代を課す。ケルプは焼けばアルカリ性の塩となり、ガラスや石けんの原料となる海藻であるが、イギリス、とりわけスコットランドでは満潮線の内側の岩場にのみ生え、日に二度海に沈むため、その量は人為的に増やせない。それにもかかわらず、この種のケルプ浜を領地の境に持つ地主は、穀物畑と同等の地代を求めるのが常である。

シェトランド諸島の周囲の海は魚に恵まれ、住民の生計を大きく支えているが、その恵みで収入を得るには、沿岸の陸地に住むことが前提となる。ゆえに当地の地代は耕地の収益に限られず、陸と海の双方から得られる収益に応じて定まる。実際、地代の一部は海魚で納められ、魚の価格の中に地代が織り込まれるという、この地ならではの稀有な例が見られる。

以上より、地代は土地利用の対価であり、その性格は本質的に独占価格にほかならない。水準を定めるのは地主の改良費や受取可能額ではなく、借り手の支払可能額である。市場に乗るのは、通常価格で出荷に要する投下資本と通常利潤を回収できる土地生産

3 第十一章 土地の地代——その性質と形成（一）

物に限られる。価格がこれを上回れば、その差額が地代となり、上回らなければ、たとえ市場に出しても地代は生じない。上回りの有無を決めるのは需要である。

土地の生産物には、流通費用を常に上回る価格で売れるものと、上乘せが出たり出なかったりするものがある。前者からは例外なく地代が生じ、後者は事情次第で地代が生じたり生じなかったりする。

留意すべきは、地代の現れ方が賃金や利潤と異なることである。賃金と利潤の多寡は価格を上下させる原因であるのに対し、地代の多寡は価格が決まった結果として生じる。すなわち、供給に必要な賃金と利潤の合計が価格水準を規定し、価格がその必要額をどれだけ上回るかに応じて、地代は高くも低くもなり、上回らなければ発生しない。

本章は三部から成る。第一に、恒常的に地代を生む土地の産出物、第二に、事情により地代が生じたり生じなかったりする産出物、第三に、改良の各段階において、これら二類の粗生産物同士およびそれらと工業製品との相対価値が自然にいかに変動するかを扱う。

第一部 恒常的に地代をもたらす土地の産物

人は他の動物と同じく、糧が増えると自然に数が増える。ゆえに食料の需要は絶えない。食べ物は労働の支払い手段であり、その獲得のために働く人は常に現れる。ただし賃金が高止まりすれば、最も儉約して運用した場合に養えるはずの量と同じだけの労働は必ずしも買えないことがある。それでも、その地域で当該の仕事について一般とされる水準に照らすなら、食べ物は常に、その水準に見合う労働を確保しうる。

とはいえ、土地はほばいかなる条件においても、市場に出すために必要な労働を最高水準で維持してなお余るだけの食料を生む。その余剰は、雇用に投じた資本の回収と通常利潤を超えて積み上がるゆえ、結果として必ず地代が生じ、地主の取り分が残る。

ノルウェーやスコットランドのきわめて荒れた土地でさえ、家畜の放牧に適う草は生える。乳と繁殖による収入は、放牧に要する人件費を賄い、牧夫や群主の通常利潤を確保したうえで、なお地主に小額の地代をもたらす。しかも牧草が良質であるほど地代は上がる。同じ面積でも家畜をより多く、より狭い範囲に集約して飼えるため、管理や採乳にかかる労働は減るからである。地主は、産出の増加と必要労働の減少という二重の

利得を受ける。

地代は作物の種類を問わず土地の肥沃度に応じて定まり、肥沃度が同じなら立地がこれを左右する。都市近郊の土地は、同程度に肥えた遠隔地より地代が高い。耕作に要する手間は同じでも、遠隔地から市場に運ぶには余計な費用と労力がかかり、そのぶん維持に必要な労働が増えて、農家の利潤と地代の源泉である余剰が削られるからである。加えて、辺地では一般に大都市近郊より利潤率が高い傾向にあるため、縮んだ余剰から地主に回る取り分は相対的に小さくなる。

良い道路・運河・舟運可能な河川は運送費を下げ、遠隔地を町近郊とほぼ同じ条件に近づけるゆえ、あらゆる改良の中で最も重要である。これは国土の外縁に広がる遠隔地の耕作を後押しし、都市にとっては近郊農村の独占を崩す力ともなる。同時に、その近郊農村にも利益がある。従来の市場に競争相手が入ってくる一方、自らの産物売る新たな市場が数多く開けるからである。そもそも独占は良い経営の大敵であり、良い経営が広く根づくのは、誰もが自衛のために参加せざるを得ない自由で開かれた競争がある場合に限られる。この点をめぐって、五十年ほど前、ロンドン近郊のいくつかの郡が、遠隔地へのターンパイク延伸に反対する請願を議会に出した。賃金の安い遠隔地が草や

穀物をロンドンでより安く売り、自分たちの地代が下がつて耕作が成り立たなくなると恐れたからである。だが実際には、その後、彼らの地代は上昇し、耕作も改善した。

中程度の肥沃な土地でも、同じ面積の最良の牧草地より、穀物畑のほうが人の食料をはるかに多く生み出す。耕作には手間がかかるが、種の補充と働く人の生活を賄ったあとになお大きな余剰が残る。もし肉一ポンドの価値がパン一ポンドを超えないなら、この余剰はどこでも高く評価され、農家の利益と地主の地代の基盤はいっそう厚くなる。農業がまだ素朴だった初期段階には、実際にこの関係が広く成り立っていたと考えられる。

パンと食肉の相対価格は、農業の進度に応じて入れ替わる。初期段階では未開の広野が放牧に供され、肉余り・パン不足となり、希少なパンに競争が集中してパンが高騰する。探検家ウリョアによれば、ブエノスアイレスでは四十〜五十年前、二百〜三百頭の群れから選ぶ去勢牛一頭が四レアル（スターリング換算で二十一ペンス半Ⅱ一シリング九ペンス半）と非常に安く、パンの価格には特筆がない。牛は実質「捕える労」だけで賄えるのに対し、穀物には多くの労働が要るうえ、当時の同地は欧州からポトシ銀山へ通じるラ・プラタ川の直行路にあり、貨幣賃金が著しく低廉だったとは考えにくい。そ

の後、耕作が国土の大半に及ぶとパンの供給が肉を上回り、競争は肉へ移って、やがて肉のほうがパンより高くなる。

耕作が広がるにつれ、未改良の原野だけでは食肉の供給が足りなくなる。そのため耕地の相当部分を家畜の繁殖や肥育に振り向けることとなり、食肉の価格には飼養の手間賃に加え、その土地を穀作に使った場合に得られたはずの地代と農家の利潤まで織り込まれる。未改良地で育った家畜も、市場では重量と品質が同じなら改良地の家畜と同値で売れるため、原野の地主はその恩恵を受けて地代を引き上げる。スコットランド高地では、かつて食肉がオートミールのパンと同じかそれ以下であったが、連合法で高地の牛がイングランド市場に出荷されるようになると、相場は今世紀初頭の約三倍に、地代も三〜四倍に上がった。今日のグレートブリテンでは、上質の食肉一ポンドは上質の白パン二ポンド超に相当し、豊作年には三〜四ポンド分に当たることもある。

改良が進むほど、未改良牧地の地代や利潤は改良地、ひいては穀物の地代や利潤を事実上の基準として決まる。穀物は毎年収穫できる一方、食肉の肥育には四〜五年を要する。同じ面積で得られる食料は穀物のほうが多いため、食肉は数量の不利を価格で補わねばならない。補い過ぎれば耕地は牧地化が進み、補い切れなければ牧地の一部は耕地

へ戻る。

とはいえ、牧草地（家畜の飼料を直接生産する土地）と穀物地（人の食糧を直接生産する土地）の地代や利潤の均衡は、主に大国の改良地の広い範囲でしか見られない。局地では事情が逆転し、牧草地のほうが穀物地よりはるかに高い地代や利潤を生むことがある。

大都市の周辺では、牛乳や馬の飼料への強い需要に食肉の高値が重なり、草地の価値は穀物に対する自然な比率をしばしば上回る。この地域限定の利益は、当然ながら遠隔地には及ばない。

人口が過密になると、どれほど改良の進んだ国でも、国内だけで牧草と穀物の双方を十分には賄えなくなる。この場合、運びにくくかさばる牧草は主として国内で生産し、国民の主食である穀物は主として域外に求める分担が生じる。現代のオランダがその例であり、古代ローマの繁栄期のイタリアでも広く見られた。キケロの伝えるところでは、老カトーは私有地経営について「よく飼うのが第一、そこそこに飼うが第二、下手に飼うが第三、耕作は第四の利益」と説いた。実際、ローマ周辺では穀物の無償ないし廉価の配給がしばしば行われ、耕作意欲は大いに阻害された。配給穀物は征服州から調達さ

れ、一部の属州は税の代納として收穫の十分の一を、一ペック当たり約六ペンスの定価で共和国に納めた。こうした安価な放出は、ラティウムなど古来のローマ領がローマ市場に出す穀物の相場を押し下げ、当地の耕作を不振に追い込んだに違いない。

穀物中心の開けた地域では、きちんと囲った牧草地が周囲の穀物畑より高い地代になることが少なくない。作業牛や馬の飼養に資するため、その地代は牧草そのものの収益というより、そこが支える穀物地の価値に由来する。ただし周辺が全面的に囲い込まれれば、この上乗せ分は縮む見込みである。スコットランドで囲い地の地代が高いのも囲い込みが不足しているからで、稀少性がなくなれば長くは続かない。囲い込みの利点は牧草地でいっそう大きく、見張りの手間が省け、番人や犬に煩わされない分だけ家畜の採食が進む。

しかし、地の利がない場合には、住民の常食たる植物性主食（たとえば穀物）の地代や利潤が、その栽培に適した土地での牧草地の地代や利潤の事実上の基準となる。

人工草地とカブ・ニンジン・キャベツなどの飼料作物の導入により、同じ面積でも自然草地より多くの家畜を養えるようになった。そのため、改良の進んだ国で一般的であった「肉がパンより高い」という傾向は、いくぶん和らぐはずである。実際、少なくとも

もロンドン市場では、食肉のパンに対する価格比は十八世紀初頭より現在のほうがかなり低いとみる根拠がある。

バーチ博士は『ヘンリー王子伝』付録において、王子が通常購入していた精肉の価格を記している。重量六百ポンドの牛四分体はおおむね九ポンド十シリング、すなわち百ポンド当たり三十一シリング八ペンスであった。ヘンリー王子は一六二二年十一月六日に没し、享年十九であった。

一七六四年三月、食料高騰の原因を調べる議会調査が行われ、バージニアの商人は、一七六三年三月の牛肉の船積み価格は百ポンド当たり二十四〜二十五シリングが通常であったが、翌年の高値期には同じ重量と品質で二十七シリングを払ったと証言した。とはいえ、この一七六四年の価格でも、ヘンリー王子が常に支払っていた相場より四シリング八ペンス安い。付言すれば、長距離航海向けの塩蔵には最上質の牛肉しか用いられない。

ヘンリー王子の支払額は、良質・並質を通算した枝肉全体で一ポンド当たり三・七五ペンスである。とすれば、上質部位の小売価格は少なくとも一ポンド当たり四・五ペンス、ふつうは五ペンスを下回らなかったはずだ。

一七六四年の議會調査では、証人が最上級牛肉の良質部位を小売で一ポンド当たり四・四・二五ペンス、粗い部位を七ファージング（すなわち一・七五ペンス）と二・五ペンスと証言した。いづれも同年三月の通常相場よりおよそハーフペニー高いが、それでもヘンリー王子の時代の一般的な小売価格よりはなおかなり安い。

前世紀初頭の十二年間、ウインザー市場における最上等小麦の平均価格は、一クォーター（ウインチェスター・ブッシェル九個）当たり一ポンド十八シリング三ペンス六分の一であつた。

しかし、一七六四年を含む直前の十二年間では、同一規格の平均価格は一クォーター当たり二ポンド一シリング九ペンス二分の一に上昇した。

以上より、前世紀初頭の十二年間は、一七六四年を含む直前の十二年間と比べて、小麦は相当に安く、精肉は相当に高かつたといえる。

大国では、耕地の大半が人の食料か家畜の飼料の生産に充てられ、これらの地代と利潤が他の作物地の事実上の基準となる。ゆえに、特定作物の収益がそれを下回れば、その土地はやがて穀物や牧草の生産に転用され、上回れば穀物・牧草用の耕地の一部がその作物に切り替わる。

土地を作物向けに整える初期改良費が大きい生産物、また毎年の耕作費が高い生産物は、前者では一般に穀物・牧草より地代が高く、後者ではより大きな利益を生みやすい。ただし、その優位はたいてい、追加費用に見合う妥当な利子や補償の範囲を大きくは超えない。

ホップ畑・果樹園・菜園は、穀物畑や牧草地に比べて地代も耕作者の利益も高く出がちであるが、その形に整える初期投資が重く、地代が高くなること、また運営にも綿密で高度な管理が要することがその理由である。さらに、ホップや果実の収穫は不安定なため、価格には突発的損失の補填に加え、保険料に似た上乘せが含まれる。それでも園芸家の暮らしはおおむね質素で中くらいにとどまる。富裕層が道楽としてこの楽しい園芸を広く行い、最良の産物を自家用に自ら賄ってしまうため、営利としての利幅が出にくいからである。

地主がこうした改良から得る利得は、たいてい初期投資を補う程度を出ず、超過は稀である。古い農法では、葡萄園に次いで水利のよい菜園が最も価値ある区画とされたが、約二千年前の農業論者デモクリトスは、菜園を堅固な壁で囲うのは割に合わぬと説いた。石壁は費用倒れになり、日干し煉瓦は雨や冬の嵐に脆く、修繕が絶えないからである。

これを伝えるコルメラは反論せず、いばらの生垣を儉約かつ有効な囲いとして勧め、耐久と侵入防止の実効を自らの経験で示したが、当時はまだ一般的ではなかったらしい。

パッラディウスも、先達ウァツロの見解に従って同旨を採る。要するに、古代の改良家の判断では、菜園の収益は特別な手入れと灌漑費を賄うのが精いっぱいであった。日差しの強い地帯では、昔も今も畝ごとに用水を引くのが常識である。他方、欧州の大半では生垣で足りる一方、英国や北方では上等果実の完熟に壁が不可欠で、その建設・維持費は果実価格に織り込まれる。果樹用の壁が菜園を取り囲むことも多く、菜園は自らの収穫では賄いにくい囲いの恩恵を受けている。

適切に造成され成熟した葡萄園は、古代でも現代のワイン産地でも農場で最も価値が高いとされてきた。他方、新規植栽の採算は古代イタリアでも論争となり、栽培好きのコルメラは収益と費用の比較から「最も有利な改良」と論じた。しかし新規事業の損益計算は、とりわけ農業では当てにならない。もし実入りが常に彼の見立てどおり大きいなら、議論は起こらなかったはずである。この争点は今日のワイン諸国でも繰り返され、農業書の著者（高度栽培の推進者）は概してコルメラ支持である。フランスでは旧来の葡萄園主が新植禁止に奔走し、現場の実感として「葡萄は他作より儲かる」ことを示す。

同時に、その超過利益は、葡萄の自由栽培を抑える法が存続する間だけ保たれることも物語る。実際、一七三一年、評議會は国王の個別許可（州総監の現地調査で「他作に適さない土地」と認定）なしに新規葡萄園の開設や、二年中断した古園の再開を禁ずる命令を出した。名目は穀物・牧草の不足とワインの過剰であつたが、過剰が事実なら命令は不要で、市場が自然に葡萄の利潤を穀・牧の水準まで引き下げ、新植を止めたはずである。葡萄園の増加で穀物が乏しくなるとの懸念にも疑いがある。ブルゴーニュ、ギュイエヌ、オー＝ラングドックなどのワイン州では、土地が適する所では穀作も入念に営まれ、片方の栽培が雇う多くの手が他方の産物の即時の市場となり、相互に押し上げる。支え手を減らして穀作を奨励する発想は、製造業を縮めて農業を伸ばそうとするのに等しく、逆効果である。

要するに、整地・改良への多額の初期投資や高い維持耕作費が要る生産物は、表向きには穀物・牧草より地代・利潤が高く見えても、その優位が特別費の回収にすぎないかぎり、結局は一般作（穀物・牧草）の地代・利潤が基準となる。

また、ある作物に適した土地が希少で有効需要を満たせない場合、その生産物は他の耕地の相場に見合う地代・賃金・利潤をすべて賄い、なお上乗せしてでも買い手が全量

を引き取る。ゆえに、改良や栽培にかかった費用を差し引いた価格の余剰は、穀物・牧草の余剰との比例を外れてどこまでも膨らみ得、その超過分の大半は地主の地代に流れ込む。

たとえば、ワインの地代・利潤が穀物・牧草のそれと自然な比率に収斂するのは、良質ながら平凡なワインを産する葡萄園に限られる。この種の畑は軽い砂礫や砂質の土壌でほぼどこでも栽培でき、取り柄は健全さと酒精の強さに尽きる。国の一般的な農地が競い得るのもこの水準までで、特異な品質をもつ葡萄園とは土俵を異にする。

しかも葡萄は土壌差の影響がきわめて大きく、ある土は他の手段では再現できない独特の風味（実体であれ名声であれ）を生む。この風味がごく少数の畑に限られることもあれば、小区域の広い範囲、さらには州域に及ぶこともある。かかるワインは、通常の葡萄畑の相場どおりの地代・賃金・利潤を賄える価格で買う有効需要に対して供給が不足し、すべてがより高い支払意欲をもつ層に回って並品より高値が付く。上乘せ幅は流行と希少が買い手の競争をどれほど煽るかに依存し、その増分の大半は地主の地代となる。これらの畑が概して入念に耕されるのも、高値ゆえに怠慢の損害が大きすぎ、誰しも注意深くならざるを得ないからであり、その高価格の一部を充てるだけで、特別に投

じた労務の賃金と、それを動かす追加資本の利潤は十分に賄われる。

西インドの砂糖植民地は、欧州の有効需要に対して供給が恒常的に不足し、通常作物で賄われる地代・利潤・賃金に上乘せした価格でも砂糖が完売するという点で、希少な高級ワインの畑にたとえられる。これに対し、コーチシナでは、同国の農政に通じたポワール氏によれば、最上白砂糖は一クイントル（約一七五バリ斤）三ピアストル、すなわち約一三シリング六ペンスで、英式ハンドレッドウェイトに換算しても約八シリングにすぎず、英領由来の褐糖相場の四分の一未満、最上白砂糖の六分の一未満である。

同地では耕地の大半が米や穀物（大衆の主食）に充てられ、価格は改良の初期費用と年次耕作費に見合う自然な比率に保たれているが、西インドの砂糖価格は欧米の穀・米との比率から大きく外れている。砂糖農園主のあいだには「ラム酒と糖蜜で耕作費は賄え、砂糖は丸ごと利益だ」との言い回しすらあるが、もし真実なら、穀農が「粃殻と藁で費用を払い、穀粒は総利益だ」と言うのと同じである。それにもかかわらず、ロンドンなどの商人組合は、距離と現地司法の不備による回収の不確実性を承知で、植民地の荒地を購入し、代理人に改良と耕作を任せ続けている。他方で、司法が整い回収の見込みが確かなスコットランド・アイルランド・北米の肥沃な穀倉地帯で、同様の遠隔経営に踏

み切る者はほとんどいない。

ヴァージニアとメリーランドでは、収益性の点でトウモロコシよりタバコが優先されている。タバコは本来、欧州の広い地域でも採算が取れたが、各農場からの徴税より輸入時課税のほうが容易とされたため、ほぼ全域で重税の対象となって栽培自体が（きわめて不合理にも）広く禁じられ、栽培許可地域に事実上の独占が生まれた。最大産地である両植民地は競争を抱えつつも、その利を大きく享受している。ただし、砂糖ほどのうま味はない。英国の商人資本が遠隔投資で改良・運営したタバコ農園の話は乏しく、砂糖島のように巨富を築いて本国に戻るプランターも聞かれない。タバコ偏重は欧州の需要がなお満たされていない証左だが、砂糖ほど逼迫してはいないのだろう。現行価格は、トウモロコシ地帯の相場に見合う地代・賃金・利潤を十分に賄っても、上乗せは砂糖ほど大きくはないはずである。実際、農園主は供給過剰を恐れ、植民地議会は十六〜六十歳の黒人奴隷一人あたり六千株（約千ポンドの収量）という栽培上限を定め、同じ労働でトウモロコシ四エーカーの作付けも可能と見積もった。豊作年には一人あたり一定量を焼却したとの報もある（ダグラス博士。真偽には疑い）。もし価格維持にこの種の強硬策が不可欠なら、タバコが穀作に優る期間は、仮に優位が残るとしても長くは続

かないだろう。

このように、食料をつくる耕地の地代が、他の多くの耕地の地代を定める実質的な基準となる。ある作物の地代がその基準を長く下回ることはなく、そうなれば土地はすぐに別の用途へ回されるからである。反対に、ある作物の地代がつねに高いのは、その作付けに適した土地が需要を満たすほど十分でないためである。

欧州では、人の食を直接生み出す主役は穀物であり、特段の地理的事情がないかぎり穀作地の地代が他の耕地の地代の基準となる。ゆえに英国は、フランスの葡萄園やイタリアのオリーブ園を羨む必要はない。特殊な地域を除けば、それらの資産価値も結局は穀物相場に左右され、穀作の地力において英国は両国にほとんど劣らないからである。

ある国で、その国の常食たる植物性主食が、普通の土地で同程度の耕作を施した際に最良の穀物地をはるかに上回る収量をもたらす作物であるなら、地代は必然的に大きくなる。地代とは、賃金と投下資本の回収および通常利潤を差し引いたあとの余剰である。慣行的な賃金水準にかかわらず、余剰が大きいほど多くの労働者を養えるため、地主はより多くの労働を雇い指揮できる。したがって、地代の実質価値や地主の権力・権威、他人の労働が生む生活必需品や便益に対する支配力は大きく高まる。

水田は、一エーカーで年二回収穫でき、各回三十〜六十ブッシェルが一般的で、その供給力は最肥沃の穀物畑を上回る。労働投入は重いが、費用を差し引いても余剰は厚い。ゆえに、米が人々の常食で、耕作者も米で生計を立てる地域では、この余剰は穀物地帯より地主に手厚く配分されやすい。実際、カロライナではプランターが農家兼地主で、地代と利潤は実質一体であり、年一作で、欧州の食習慣ゆえ米が一般的主食ではないにもかかわらず、稲作のほうが穀作より収益性で勝ることが確かめられている。

良好な水田は一年中湿地で、季節によっては一面に水が張る。この環境は小麦などの穀物や牧草、葡萄その他多くの有用作物には不向きであり、逆にそれらに適した土地は水稲には合わない。したがって、稲作地域でも水田の地代が他の耕地の地代を決める基準にはならない。そもそも他の耕地を水稲に転用できないからである。

ジャガイモ畑の生産力は水田に匹敵し、小麦畑を大きく上回る。一エーカー当たりの標準収量はジャガイモ約一万二千重量、小麦約二千重量で、ジャガイモは含水率が高いが、半分を水分と見積もっても固形成分は約六千重量で小麦の三倍に当たる。しかも栽培費は小麦より軽く、小麦に通常伴う休憩がジャガイモで常時必要な培土・中耕などの追加作業を上回って相殺される。ゆえに、もし欧州のどこかでジャガイモが米のような

主食となり、現在の小麦並みに耕地を占めれば、同じ面積で扶養できる人口は大幅に増え、投下資本と賃金を差し引いた後の余剰も拡大する。その余剰の配分は地主に厚くなり、人口は増え、地代は現行を大きく上回る水準へ押し上げられるだろう。

ジャガイモに適した土地は他の主要作物にも広く向く。したがって、ジャガイモが今の穀物と同じ割合で耕地を占めるようになれば、同じ仕組みにより多くの耕地の地代もそれに左右されることになる。

ランカシャーの一部やスコットランドには、労働者にはオートミールのパンが小麦パンより勝るといふ説があるが、その正しさには疑いがある。オートミールを常食とするスコットランドの庶民は、小麦パンを食べるイングランド同階層に比べ、概して体格や見映え、働きぶりで劣る一方、上流層にはその差が見られないからである。これに対し、ジャガイモは事情が異なる。ロンドンの椅子かつぎや荷運び、石炭荷揚げ人夫、さらには不運にも売春で生計を立てる女性の多くは最下層のアイerland出身で、日常の主食はこの根菜だとされる。彼らがしばしば英国で最も屈強な男、最も美しい女と評される事実は、ジャガイモが栄養豊富で健康に適した食物であることを強く示している。

ジャガイモは長期保存が難しく、穀物のように二〜三年も備蓄できない。出荷前に腐

るおそれが作付け意欲を弱め、これがおそらく大国でジャガイモがパンのように全階層の主な植物性食品として定着しにくい最大の障害になっている。